



仙台市立病院医誌再刊にあたって

院長 丹野 三 男

このたび長らく休刊していた仙台市立病院医誌が、渡辺外科医長等の熱心な努力によって新たに仙台市立病院医学雑誌として再刊されたことは誠に喜ばしい限りである。この時にあたり当院の院内学術活動の歴史をふり返って巻頭の言葉としたい。

当院の開院は昭和5年にさかのぼるが、院内の人的、物的整備がなされ、診療内容が充実されるにつれ学術活動の一つとして、昭和12年12月、院内集談会が発足した。当時の記録によると、「医学の進歩は実に日進月歩である。患者診療にあたり新しい知識と新しい技術をもって臨むということは我々の念願する所であり、又かくあらねばならない。批判の無い所に進歩は無いのであるし、刺激は常に生活に新しさを与えるものである。かかる意味に於て本院臨床的集談会を開催するものである」という趣旨で初められ、春秋2回開催し、将来市立病院医誌をつくることが提案されている。其の後この集談会が内にあるは学術活動の中心となり、外にむけては各々の診療科の学会発表となって発展して行ったのである。

昭和34年1月、集談会のメンバーを医師のみでなく薬剤師、放射線及び臨床検査の技師等にまで広げ、且つこれらの医療従事者の親睦をはかり、侃々諤々議論して診療の向上をはかるため諤親会が誕生した。以後この諤親会が中心となって毎月1回集談会を催し、症例報告、各学会総会に出席しての印象報告、各科共通のテーマについての討論、院外講師による教育講演等が活発に行われ、且つ懇親の実をあげるに至ったのである。この機運に乗じて当時の歯科杉本是孝君、外科菊地弘一君と小生等で長年懸案であった市立病院医誌の発刊を企て、その第1号を昭和34年4月1日発刊するに至り以後第6号迄刊行した。

昭和39年以後救急医療が加わって日常診療が極めて忙しくなり、各々の診療科でのカンファレンスが多くなり、又各科共通のテーマを見出すことに困難を来した等の理由で病院全体の集談会が衰微していき、又熱心な編集者の退職等によって医誌も休刊となったのである。

然しながらここ数年以来渡辺至君等の熱意により構想を新たに集談会が再び活発に開かれるようになり、更に今回の医誌再刊へと発展していったのである。

病院診療機能の評価として剖検率の高さ、病歴及び図書整備、医療機器の充実等多々あるが、集談会、学会発表等の学術活動の盛んであることも非常に大切と思われる。

新病院開院を目前に控え、ここに医誌再刊が成されたことは当院の将来の発展にとり最も時宜を得たものと思ひ、ここに喜びを表するものである。